九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大学一般教育における優秀な映画鑑賞者の育成のために

鈴木，右文
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/5424

出版情報：言語文化論究. 15, pp.33-44, 2002-02-15. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

大学一般教育における優秀な映画鑑賞者の育成のために

鈴　木　右　文

1．映画鑑賞能力養成を目標に

筆者は生成文法による英語の分析やコンピュータによる英語教育を本来の研究分野とする九州大学の英語担当教官だが，一般教育科目として自発的に映画に関する授業を1996年度から担当している。これは「映画の世界」という名称で，総合科目という，複数の教官の協力のもとに実施される授業であり，筆者はオーガナイザーを務めてきた。[1)]

鈴木（1999）において，筆者は大学教養教育における映画教育の意義を説いた。映画は文学，音楽，絵画などと比較して勝るとも劣らない芸術の分野であるのに反し，日本の大学生の映画に関する知識や理解が圧倒的に不足している。それにもかかわらず大学教養教育レベルでの映画教育が貧弱もしくは無いに等しい点を指摘し，検定教科書や学習指導要領にも触れながら，義務教育の中に映画がほとんど取り上げられていないことが直接の原因であることを主張，改善すべき点として，映画に関する国内の高等教育機関が少ないこと，映画に関係する国立の施設が極小であること，映画や芸術に関する国家予算が海外に比べて極端に少ないことなどを述べた。そして，大学教養教育としての映画に関連した授業において，どの範囲をどの程度教えるかという概括的イメージすら世にないことを指摘し，それを自らの将来の課題とした。

何をどれだけ取り扱うかを考える場合，様々なアプローチの方法が可能であることに気付く。他の芸術分野と同様，映画にも制作側と鑑賞側の視点がそれぞれありうるが，映画は通常一人では制作することができず，常にチームワークや資金調達などが課題となるという独自の側面も持つ。１本の作品にも様々の関係者等が関わりを持つわけで，焦点を当てるに値する視点を少し挙げただけでも，監督，スタッフ，俳優，プロデューサー，スタジオ，カメラ技術，照明技術，録音技術，メーク技術，映画史，映画館，配給会社，ロケ，セット，編集，原作，脚本，音楽，映画評論，映画理論など多岐にわたっており，半年間の授業でまんべんなく伝えることははなはだ困難であるし，専門教育ではないのであるから，あまり詳細に立ち入ることも適切ではない。あくまで教養科目であって専門科目ではないという点を考慮すれば，映画制作関係者になるためにこそ必要であるような事項は捨象してよいだろう。従って，知的生活をより豊かにしてくれる点を重視し，映画製作関係者ではなく，優秀な映画鑑賞者を育てることが目的となろう。より深く作品を（それも特に芸術性の高い作品を）理解し，それがもたらすものを受け止める力を持てるようにすることが，大学教養教育における映画教育の役割ではないかと考えられる。そのような優秀な映画鑑賞者が増えれば，より大きな人生の喜びを得ることができる上，日本の映画産業界に刺激を与えることにもつながるであろう。産業の活性化にはやはり教育が肝要なので

あるから。

優秀な映画鑑賞者を育成することに限定しても，なお扱う項目として様々なものが考えられる。それらのうち本稿では，学生に実施したアンケート調査をもとに，大学生の映画の知識や経験についてのどのような弱点を具体的に克服したらよいかという点に焦点を絞ることにする。

2．アンケートの実施

アンケートは，2001年10月17日，すなわち2001年度後期の総合科目「映画の世界」の初回の授業時に出席していた受講希望者201人を対象として無記名で実施した。後期に総合科目を受講するのはほとんど1年生で，1学年は約2,300名であるから，おおよそ学生の1割が受講を希望したことになり，そもそも映画に対して人並み以上の興味がある学生が集まってきているものと思われる。結論から先に言えば，そうした学生たちでも，全体として見れば片寄った映画鑑賞行動を取り，優秀な映画鑑賞者とは言いにくい状態にある。ましてやこの授業の受講を希望しなかった大多数の学生についてはもっと状況が深刻であろう。

3．地域的に片寄った映画鑑賞行動

アンケートの第1問とその回答分布は以下のようなものである。

【1】 あなたは年に何本ほど映画館で映画を鑑賞しますか。(0-9は0本が9人の意)
0-9，0.3-1，1-40，2-34，3-33，4-11，5-27，6-9，7-1，8-4，10-10，12-1，15-4，20-5，40-1，50-1，120-1，0～1-1，1～2-2，2～3-1，3～4-1，5～6-1，7～8-1，10～12-1，30～40-1

年1-5本というところが最も多い。これに対し，1996年の数字であるが，全国映画館入場者数は1億1,969万人（日本映画製作者連盟発表），同年の日本の人口は1億2,586万人であり，国民一人あたりの年間映画館入場回数は1回を割り込んでいる。それに比べれば，受講希望者は量的に平均以上の映画鑑賞者であると言える。

しかし，鑑賞する作品を調べると偏りが多いことがわかる。1999年，2000年の『キネマ旬報』誌の専門家による年間ベストテン（2000年2月下旬号，2001年2月下旬号に掲載）によると，外国映画部門のベストテンに選出された作品の制作国は次のとおりである。

1999年
米：恋に落ちたシェークスピア，シン・レッド・ライン，マトリックス，アイズ・ワイド・シャット，シックス・センス
英：エリザベス
伊：ライフ・イズ・ビューティフル
ギリシャ／仏／伊：永遠と一日

仏／独／ユーゴスラビア：黒猫・白猫
イラン：運動靴と赤い金魚
2000年
米：スペース・カウボーイ，ストレイト・ストーリー，アメリカン・ビューティー，マルコビッチの穴，グラディエーター
デンマーク：ダンサー・イン・ザ・ダーク
スペイン：オール・アバウト・マイ・マザー
中国：あの子を探して
米中：初恋のきた道
韓日：ペパーミント・キャンディー

これら芸術性が高く評価されるベストテンでは，アメリカ映画が半分の10本，あとはヨーロッパ６本，アジア４本となる。ところが，実際に大学生が映画館で見る映画にどこの国・地域の作品が多いか調べてみると，以下の結果となった。

【２】 それはどの国・地域の映画が多いですか。（複数回答あり，のべ253人）
アメリカ－171，日本－44，ヨーロッパ－27，日本以外のアジア－11，その他－0

アメリカは半分をゆうに越え，７割近くに達し，日本の大学生が鑑賞するのはアメリカ映画に片寄っていることがわかる。昨今は日本が映画の市場として無視できない存在であるので，アメリカ資本もシネマ・コンプレックスの開拓など，日本に大規模なてこ入れをしている実態があり，それに学生も流されているという面があるように思う。

因みに，下記の『キネマ旬報』ベストテン作品の制作国を聞いてみた。[2)]

【４】 制作国を知っている場合はその国名を記入してください。（数値は正解者数）
さらば我が愛－覇王別姫-中国-14，ともだちのうちはどこ？-イラン-4，悲情城市-台湾-0，処女の泉-スウェーデン-0，天井桟敷の人々-仏-4，自転車泥棒-伊-3，西便制－風の丘を越えて-韓国-0，セントラル・ステーション-ブラジル-15，大地の歌-インド-0，晩春-日本-5

こうしたアメリカ以外の名画についての知識に関わる数値（平均4.5，最大15，最小0）は，後述【６】（2000年の主要作品で見たことのあるもの）のアメリカ映画（スペース・カウボーイ，ストレイト・ストーリー，アメリカン・ビューティー，マルコビッチの穴，グラディエーター，Ｍ：１－２，シックス・センス，グリーンマイル，パーフェクト　ストーム，トイ・ストーリー２，エンド・オブ・デイズ，ターザン，スチュアート・リトル）（平均45.7，最大112，最小14）を実際に見ている人数に比べるとはるかに低く，特に韓国，インドといったアジアの国々の映画になじみのない実態がわかる。[3)] 後述【７】（映画史上の秀作で見たことのあるもの）からもこの傾向は一層はっきりする。外国映画の数値を見ると，2000年の「あの子を探して（チャン＝イーモウ）」「初恋のきた道（同左）」の２本の中国映画，1990年の「悲情城市（ホウ＝シャオシェン）」「冬冬の夏休み（同左）」の

２本の台湾映画は，同年の他のベスト５作品の数値に比べて際だって低いことがわかる。

【６】から，日本映画に対する大学生の馴染みの薄さも実証できる。2000年のベストテン映画における学生の邦画鑑賞率が約28％（外国772対日本296）であるのに対し，1997年の封切り作品における邦画率は約35％（外国441対日本242，鈴木（1999）による）であり，日本映画が軽視される傾向にあることがうかがえる。

４.「売れる」作品に片寄った映画鑑賞行動

また，2000年の外国映画，日本映画の作品のうち，学生がどれを見ているかを調べてみると，専門家が選んだ質的なベストテン（ここでは『キネマ旬報』2001年２月下旬号に発表された2000年封切り作品のベストテン）に選出された作品よりも，興行収入が多い作品に片寄っていることがわかる。

【６】 下記の作品のうち，見たことがあると自信を持って言えるものは○を，聞いたことだけはあるというものには△を付けてください。[4)]

・2000年外国映画ベストテン（計263）：スペース・カウボーイ-24，オール・アバウト・マイ・マザー-13，あの子を探して-1，初恋のきた道-4，ストレイト・ストーリー-20，アメリカン・ビューティー-45，マルコビッチの穴-28，グラディエーター-76，ダンサー・イン・ザ・ダーク-52，ペパーミント・キャンディー-0

・2000年外国映画興行収入ベストテン（計509）：Ｍ：１－２-79，シックス・センス-112，グリーンマイル-40，パーフェクトストーム-46，トイ・ストーリー２-47，エンド・オブ・デイズ-40，ターザン-23，ジャンヌ・ダルク-79，スチュアート・リトル-14，ワールド・イズ・ノット・イナフ-29

・2000年日本映画ベストテン（計138）：顔-5，ナビィの恋-7，御法度-17，十五才学校Ⅲ-10，バトル・ロワイヤル-65，三文役者-1，スリ-2，独立少年合唱団-1，雨あがる-14，はつ恋-16

・2000年日本映画興行収入ベストテン（計158）：ポケットモンスター　結晶塔の帝王-3，ホワイトアウト-39，ドラえもん　のび太の太陽王伝説-18，名探偵コナン瞳の中の暗殺者-27，2000年春東映アニメフェア-1，ゴジラ2000ミレニアム-7，リング０/ISOLA-36，太陽の法　エル・カンターレへの道-1，どら平太-5，ＧＴＯ-21

これらの作品を見比べれば明らかなように，質的に専門家から評価されてベストテンに選ばれるような作品と，興行収入のあがるいわゆる「売れる」映画とは重なりがほとんどない。[5)] ということは，映画鑑賞者一般に，宣伝等の効果により，時間を「売れる」映画の方により多く費やし，売れないながらも質の高い作品は見逃す傾向にあるということになる。アンケートの数値に目を移すと，映画に興味のある大学生に限ってみても「売れる」作品の方をよく見ていることがわかる。なお，邦画で差が少ないのは，興行収入ベストテンにいわゆるお子様映画が多く，子供を持たない学生が積極的な鑑賞者になりにくいからと思われる。また「バトル・ロワイヤル（深作欣二）」が，その刺激的内容の大量宣伝と，

監督対政治家の倫理性を巡る論争という希な出来事によって多くの観客を得，アンケートの数値を押し上げているという特殊事情も指摘できる。

5．現代に片寄った邦画の鑑賞行動

学生の映画鑑賞行動の特徴のひとつに，【7】（戦後の『キネマ旬報』の年間ベストテンの第5位までを5年ごとに取り上げ，見たことがあるかどうか尋ねている）が示すとおり，邦画で顕著な現代の作品への片寄りがある。これはまさに映画教育の欠如に起因するものである。例えば日本文学であれば，国語教育の中で作品を鑑賞し，また文学史にも触れる。従って，例えば近代小説の出発点である夏目漱石や森鴎外は学生一般にとって常識中の常識である。しかし，映画教育の欠如により，映画に興味があるはずの大学生に絞って尋ねてみても，映画に親しみのある人々には常識中の常識とされる小津安二郎（1960「秋日和」-0），今井正（1950「また逢う日まで」-0），木下恵介（1955「野菊の如き君なりき」-0，1960「笛吹川」-0），成瀬巳喜男（1955「浮雲」-0）といった日本の映画の発展に尽くした過去の巨人たちをよく知らないのである。一方外国映画についても，後述【5】（主要な映画監督について知っているかどうかを尋ねる）にあるように，アメリカの過去の巨人ジョン＝フォードが知られていないといった邦画との平行性もかなり見られるが，直接の映画教育以外にテレビ放映などで古い時代の作品の中にも馴染みのあるものがあるようで，【7】が示すように，「イージー・ライダー（デニス＝ホッパー，1970）」「明日に向って撃て！（ジョージ＝ロイ＝ヒル，1970）」「メリー・ポピンズ（ロバート＝スティーブンスン，1965）」「チャップリンの独裁者（チャールズ＝チャップリン，1960）」「太陽がいっぱい（ルネ＝クレマン，1960）」「エデンの東（エリア＝カザン，1955）」などは他の作品に比べてかなりの数値に達している。

【7】 下記の作品のうち，見たことがあると自信を持って言えるものは○を，聞いたことだけはあるというものには△を付けてください。[6)]

2000年（外国計62）スペース・カウボーイ-24，オール・アバウト・マイ・マザー-13，あの子を探して-1，初恋のきた道-4，ストレイト・ストーリー-20

（日本計104）顔-5，ナビィの恋-7，御法度-17，十五才　学校Ⅲ-10，バトル・ロワイヤル-65

1995年（外国計270）ショーシャンクの空に-76，スモーク-4，マディソン郡の橋-58，フォレスト・ガンプ　一期一会-131，エド・ウッド-1

（日本計24）午後の遺言状-0，東京兄妹-0，Love Letter-12，幻の光-4，写楽-8

1990年（外国計28）悲情城市-1，霧の中の風景-0，フィールド・オブ・ドリームズ-25，冬冬の夏休み-0，ドゥ・ザ・ライト・シング-2

（日本計33）櫻の園-1，少年時代-24，死の棘-0，夢-4，バタアシ金魚-4

1985年（外国計31）アマデウス-31，路-0，ファニーとアレクサンデル-0，ミツバチのささやき-0，刑事ジョン・ブック　目撃者-0

（日本計10）それから-4，乱-5，火まつり-0，台風クラブ-1，さびしんぼう-0

1980年（外国計63）クレイマー，クレイマー-52，ルードヴィッヒ神々の黄昏-0，地獄

の黙示録-9，大理石の男-0，マンハッタン-2

（日本計13）ツィゴイネルワイゼン-4，影武者-7，ヒポクラテスたち-0，神様のくれた赤ん坊-0，遙かなる山の呼び声-2

1975年（外国計3）ハリーとトント-1，愛の嵐-1，アリスの恋-1，レニー・ブルース-0，デルス・ウザーラ-0

（日本計16）ある映画監督の生涯　溝口健二の記録-0，祭りの準備-0，金環蝕-0，化石-0，男はつらいよ　寅次郎相合い傘-16

1970年（外国計26）イージー・ライダー-11，サテリコン-0，Z-1，明日に向って撃て！-13，M★A★S★H（マッシュ）-1

（日本計3）家族-1，戦争と人間-1，どですかでん-1，エロス＋虐殺-0，地の群れ-0

1965年（外国計35）8 2/1-1，明日を生きる-2，野望の系列-0，柔らかい肌-0，メリー・ポピンズ-32

（日本計8）赤ひげ-7，東京オリンピック-1，日本列島-0，にっぽん泥棒物語-0，証人の椅子-0

1960年（外国計46）チャップリンの独裁者-24，甘い生活-0，太陽がいっぱい-21，ロベレ将軍-0，大人は判ってくれない-1

（日本計2）おとうと-2，黒い画集・あるサラリーマンの証言-0，悪い奴ほどよく眠る-0，笛吹川-0，秋日和-0

1955年（外国計22）エデンの東-21，洪水の前-0，スタア誕生-0，埋もれた青春-0，旅情-1

（日本計0）浮雲-0，夫婦善哉-0，野菊の如き君なりき-0，生きものの記録-0，ここに泉あり-0

1950年（外国計7）自転車泥棒-5，情婦マノン-0，三人の妻への手紙-0，無防備都市-0，赤い靴-2

（日本計32）また逢う日まで-0，帰郷-2，暁の脱走-0，執行猶予-0，羅生門-30

外国映画の各年計の数値を新しい時代から順に並べると62-270-28-31-63-3-26-35-46-22-7となり，時代による差ははっきり出てこないようだが，これに対し日本映画では104-24-33-10-13-16-3-8-2-0-32となり，「羅生門（黒澤明，1950）」が例外的に高い数値を示す（注３参照）ほかは，古い時代の邦画がほぼ無視されているに等しいことがわかる。

こうした傾向は，古い邦画があまりビデオやＤＶＤ化されず，古い外国映画と比べて鑑賞する機会に恵まれないことから生じるのではないかという反論が考えられるが，実際に調べてみるとその反論は正しくない。『ぴあ CINEMA CLUB 1993［洋画編］』『ぴあ CINEMA CLUB 1993［邦画編］』によると，上記ベスト５のうちビデオ化されている作品数は，1950年では外国映画日本映画ともに４本，1955年では外国映画３本に対し日本映画５本，1960年ではともに４本，1965年では外国映画３本に対し日本映画４本，1970年ではともに５本と互角なのである。

6．どの監督・作品を取り上げていくか

これまでに見たアンケート結果が示す限り，ある程度映画に興味のある大学生でも次のような残念な鑑賞行動が見られることがわかる。

1）見る作品はアメリカのものが多く，日本映画には比較的馴染みが薄く，日本以外のアジア作品は極めて少ない。

2）芸術的に優れた作品より世間ではやる作品を多く見る。

3）古い日本映画はほとんど見ていない。

いずれも予想される点ではあるが，これだけはっきり数字に出ると，やはり是正が必要と思われ，1）アメリカ以外の作品，2）芸術として優れた作品，3）古い邦画に重点を置く方針で指導したくなる。実態に即してアメリカ娯楽作品中心という選択肢もありうるが，それは時間数に余裕のある授業体系の中ですべきことのように思われる。

映画は小説と異なり，多人数で同時に全体を鑑賞できる芸術なので，授業において全編上映を実施することができ，授業の構成を考えるときには具体的な作品の選択を伴うことになりやすい。映画作品というものはやはり第一義的には監督の作品であり，文学の研究が作家を中心に展開することが多いように，映画作品もその理解のためには監督についての理解が必要になる。そこで，上記の方針に沿うために，少ない授業回数の中で，全編上映を前提とし，具体的にどの作品を取り上げるかを決定する1つの方法として，どの監督に焦点を当てるかを考察することにする（もちろん著名でない監督の重要作もあれば，授業で一貫したテーマの作品を取り上げることも考えられるので，監督から絞り込むのはあくまで1つの方法に過ぎない）。次のアンケート結果を得た。

【5】 以下の映画監督につき，最低限作品やシーンが何か思い浮かぶ程度に知っている場合は○，名前を聞いたことがあるだけの場合は△を名前の前に付けてください。[7]
（海外の監督50人，平均24.7）

・アメリカ（平均53.7）：ウッディ＝アレン-22，クリント＝イーストウッド-75，オーソン＝ウェルズ-10，エリア＝カザン-4，ジェームズ＝キャメロン-107，スタンリー＝キューブリック-83，ケビン＝コスナー-127，フランシス＝コッポラ-31，フレッド＝ジンネマン-1，オリバー＝ストーン-33，スティーブン＝スピルバーグ-188，クエンティン＝タランティーノ-50，チャールズ＝チャップリン-143，アラン＝パクラ-0，アルフレッド＝ヒッチコック-75，ジョン＝フォード-4，デヴィッド＝リンチ-15，ジョージ＝ルーカス-119，ロバート＝レッドフォード-31，ウィリアム＝ワイラー-3，ビリー＝ワイルダー-7，

・イギリス（平均2.3）：リチャード＝アッテンボロー-5，キャロル＝リード-0，デビッド＝リーン-2，

・フランス（平均4.4）：マルセル＝カルネ-1，ルネ＝クレマン-4，ジャン＝コクトー-11，ジャン＝リュック＝ゴダール-14，ベルトラン＝タヴェルニエ-1，フランソワ＝トリュフォー-3，ルイス＝ブニュエル-2，ルイ＝マル-1，パトリス＝ルコント-3

・イタリア（平均3.8）：ミケランジェロ＝アントニオーニ-4，ヴィットリオ＝デ＝シーカ-2，ルキノ＝ヴィスコンティ-4，フェデリコ＝フェリーニ-4，ベルナルド＝ベル

トルッチ-7，ロベルト＝ロッセリーニ-2
・ドイツ（平均4.0）：ヴィム＝ヴェンダーズ-4
・スウェーデン（平均2.0）：イングマル＝ベルイマン-2
・ユーゴスラビア（平均1.0）：テオ＝アンゲロプロス-1
・ソ連(平均3.5)：セルゲイ＝エイゼンシュタイン-3,アンドレイ＝タルコフスキー-4
・中国台湾（平均6.3）：チャン＝イーモウ-11，チェン＝カイコー-7，ホウ＝シャオシェン-1
・韓国（平均1.0）：イム＝グォンテク-1
・イラン（平均2.0）：アッバス＝キアロスタミ-2
・インド（平均0.0）：サタジット＝レイ-0

（日本の監督50人，平均26.9）
岩井俊二-54，内田吐夢-1，小川紳介-0，神代辰巳-0，篠田正浩-1，田坂具隆-0，原一男-0，松山善三-0，吉田喜重-0，市川崑-12，浦山桐郎-0，小栗康平-1，黒澤明-174，新藤兼人-4，勅使河原宏-4，原田眞人-0，宮崎駿-189，吉村公三郎-0，市川準-1，大島渚-91，小津安二郎-17，黒澤清-15，周防正行-53，竹中直人-99，東陽一-0，森田義光-5，伊丹十三-121，大林宣彦-44，北野武-171，神山征二郎-1，鈴木清順-6，寺山修司-19，深作欣二-36，柳町光男-0，今井正-3，大森一樹-2，木下恵介-2，小林正樹-1，相米慎二-13，成瀬巳喜男-0，降旗康男-7，山田洋次-98，今村昌平-27，岡本喜八-2，熊井啓-0，崔洋一-9，高畑勲-61，野村芳太郎-1，溝口健二-8，山本薩夫-0

注７にあるように，アンケートに登場している監督は映画の世界ではメジャーな存在であり，一般教養で取り上げる際にこれらの中から選択するのは有効な方法と思われる。

まず，外国の監督で，アメリカの監督に対する知識（平均53.7）に比べると，アメリカ以外の監督についての知識（各国平均3.7）は極端に落ち，３節の内容を更に裏付けているが，もう少し細かに学生の弱点を探ると，次のような点が指摘できる。まず，フランス（平均4.4）やイタリア（平均3.8）といった国は伝統的に名作を次々と生産し，映画史上重要な地位を占める監督が多いにもかかわらず，理解・知識が低い。また，身近であるはずの中国（平均6.3），韓国（平均1.0）といった近隣のアジア諸国も苦手である。昨今では中国も韓国も秀作を多数生産しており，世界の映画界では注目を集めている。同じことが宗教上の制約の中でしなやかな作品を送り出すイラン（平均2.0）にもあてはまるが，学生はほとんど知らないようである。更にインド（平均0.0）が映画大国ということはおぼろげながら知ってはいても，第１人者（サタジット＝レイ）の作風も知らない。従って，地域を意識して監督・作品を選択するのであれば，アジア諸国に重点を置くのがよいように思われる。西欧の映画を選択するのであれば，アメリカよりもヨーロッパを選びたい。

次に，古い邦画がほとんど見られていない実態は上記のアンケート結果からもうなずけるものである。若手ホープの岩井俊二（54），最近までテレビで活躍していた大島渚（91），最近のコメディをリードする周防正行（53），独自の世界の竹中直人（99），世界の北野武（171），「男はつらいよ」や「学校」シリーズの山田洋次（98）などの現代の監督がよく知

られているのに対し，木下恵介（2），篠田正浩（1），成瀬巳喜男（0），溝口健二（8）などは映画史上重要な過去に活躍した大監督でありながらほとんど知られていない。後者の監督作品に焦点を当てるのはよい方針である。日本の文化遺産の継承という意味から言っても必要なことである。

また，芸術性の高い映画より娯楽型の映画に馴染みがある実態も，上記のアンケートから確認できる。アメリカの監督で言えば，馴染みがあるのはスピルバーグ（188）やルーカス（119）のＳＦ娯楽大作やチャップリン（143）のコメディー，ケビン＝コスナー（127）の娯楽大作，ヒッチコック（75）のサスペンスであり，オリバー＝ストーン（33）の社会派作品，ウッディ＝アレン（22）の知的作品，ロバート＝レッドフォード（31）の「人」を描く作品，コッポラ（31）の観念的作品などには比較的親しんでいないようだ。また上記アンケートに登場するヨーロッパやアジアの監督はほとんど芸術肌であり，学生への知名度は最低である。日本の監督でも，黒澤明（174），宮崎駿（189），伊丹十三（121）あたりの数値の高さはその娯楽性の故であろう。反面，社会派の今井正（3），熊井啓（0），神山征二郎（1），小林正樹（1），新藤兼人（4），山本薩夫（0）の数値の低さは目を覆うばかりである。社会派というのは学生の苦手なカテゴリーを形成しているようである。小川紳介（0），原一男（0）のドキュメンタリーも同様である。しかし何と言っても強烈なのは，世界で黒澤に並び称せられる小津安二郎（17）があまり知られていないことである。従って，芸術性を志向するのであれば，アンケートに登場したヨーロッパ，アジアの監督作品を選びたい。日本であれば小津安二郎，上記の「大監督」，社会派やドキュメンタリー作家，もしアメリカにするのであれば上記の親しみのない４人あたりが妥当ということになろう。もっとも，最近の監督なら知られているというものでもなく，芸術性にこだわりを見せる小栗康平（1）などは世界における評価とは裏腹に全くと言ってよいほど知られていない。

７．おわりに

以上，大学生の映画に関する調査に基づいて，従来からよく言われる実態を数値で実証し，教養教育の中でどういう方針で取り上げる作品を選択していけばよいかについて方針を示した。

具体的には，大学生の見る作品はアメリカのものが多く，日本映画には比較的馴染みが薄く，日本以外のアジア作品は極めて少ないこと，芸術的に優れた作品より世間ではやる作品を多く見ていること，古い日本映画はほとんど見ていないことを実証し，アンケート【５】に登場するヨーロッパ，アジア諸国の監督作品，日本では大御所の何人か，社会派やドキュメンタリーの監督作品を選択することが１つの方針として妥当であろうと主張した。

本論では学生の映画鑑賞意識の問題にしか触れる余裕がなかった。本当はいくら意識が高まっても，それだけでは映画館で上映されたりレンタルビデオショップに並べられたりする規模が小さい作品の数値が十分上昇することにはならないだろう。しかし，映画・ビデオの配給体制の改善や映画館支援といった社会的問題の考察は筆者の力量を越えるということを正直に申し上げておきたい。

最後に，時間が差し迫った中で献身的にデータの整理を手伝ってくださった九州大学大学院言語文化研究院共通室アルバイトの萩原春美さんに紙面を借りて御礼申し上げたい。

注

1）これまでの開講内容をまとめておく。

・1996年度前期：筆者＋福岡女学院大学（当時）荒木正見教授，副題「大林宣彦の尾道を考える」，大林宣彦監督の尾道３部作「転校生（1982)」「時をかける少女(1984)」「さびしんぼう（1985)」と新尾道３部作から「ふたり（1992)」「あした(1995)」を取り上げ，舞台の尾道の存在について考えた（荒木・鈴木（1995）を参照)。

・1996 年度後期：筆者＋同僚教官４人，副題「世界映画入門」，筆者は邦画を担当，「生きる（黒澤明，1952)」「七人の侍（黒澤明，1954)」「二十四の瞳（木下恵介，1954)」「お引越し（相米慎二，1993)」「家族ゲーム（森田義光，1983)」「台風クラブ(相米慎二，1984)」を取り上げ，クラシックと現代物の概括的イメージを伝えた。他の担当者は小津安二郎，トリュフォー，香港映画，「カリガリ博士（ロベルト＝ビーネ，1917)」を取り上げた。

・1997年度後期：筆者＋同僚教官２人，副題「アジア，日本」，筆者は再び大林宣彦を取り上げ，「異人たちとの夏(1988)」「さびしんぼう(1985)」「北京的西瓜(1989)」について考えた。他の担当者は香港映画とゴジラ映画を扱った。

・1998年度後期：筆者＋同僚教官２人，副題「映像と文化」，筆者は世界の名作の紹介と日本映画史の簡単な講義を行い，鑑賞力養成を目的に「浮雲（成瀬巳喜男，1955)」を取り上げて分析した。同僚は北野武とタルコフスキーを取り上げた。

・1999年度後期：筆者＋同僚教官４人，副題「映画を考える」，筆者は簡単な日本映画史を講義し，「喜びも悲しみも幾歳月（木下恵介，1957)」を取り上げ，異時代理解をテーマとした。同僚は北野武・小津安二郎・ゴダール，ボヴァリー夫人，「インドシナ（レジス＝バルニエ，1993)」，オーソン＝ウェルズを取り上げた。

・2000年度後期：筆者＋同僚教官２人，副題「映画で考える」，筆者は異時代理解をテーマに，「家族（山田洋次，1970)」「晩春（小津安二郎，1949)」「二十四の瞳（木下恵介，1954)」を取り上げた。他の担当者は「インドシナ（レジス＝バルニエ，1993)」，「カリガリ博士（ロベルト＝ビーネ，1917)」・キートンの喜劇を取り上げた。

・2001年度後期：筆者＋同僚教官２人，副題「比較作品論」，筆者は「東京物語(小津安二郎，1953)」「2001年宇宙の旅（スタンリー＝キューブリック，1968)」を取り上げた。同僚は「太陽がいっぱい(ルネ＝クレマン，1960)」「リプリー(アンソニー＝ミンゲラ，2000)」「惑星ソラリス（アンドレイ＝タルコフスキー，1977)」を取り上げた。

2）「セントラル・ステーション（ハヴァルテル＝サラス，1999)」は12位と例外である。

3）「さらば我が愛 ── 覇王別姫（チェン＝カイコー)」が中国映画（香港）ながら数値が高いのは，第46回のカンヌ映画祭で１等に相当するパルム・ドールを受賞して知名度が高かった例外的なケースと考えられる。これは【７】1950年の「羅生門」が学生が苦手とする古い邦画であるのに，1951年のヴェネツィア映画祭でグラン・プリを獲得して数値が例外的に高いのと同じことであろう。

4）ここでは○を付けた学生数のみカウントしている。興行収入ベストテンは『キネマ旬報』2001年２月下旬号による。
5）「シックス・センス」は1999年の『キネマ旬報』外国映画ベストテン第10位で，興行収入とともにベストテンに入っている。興行収入で2000年のベストテンに入っているのは，封切りが1999年10月30日でロングラン上映だったため，2000年に入っても多数の観客があったためである。また，年によっては興行収入ベストテンと質的ベストテンの重なりがかなりあることもある。
6）○の学生のみカウントしている。また1945年はベストテンの選考が中止された。
7）○の学生のみカウントしている。50人の選択については，『キネマ旬報』ベストテンでの実績等を参考に知名度や映画史上の重要性などを加味して選定した。比較のため50にこだわったので，外国の著名な監督に漏れが多く，何でリュック＝ベッソンの名がないのだ，マーチン＝スコセッシがないのだという話になるが，致し方ないところである。

参考文献

荒木正見・鈴木右文（1995）『尾道を映画で歩く ― 映像と風景の場所論 ― 』中川書店
鈴木右文（1999）「大学教養教育における映画教育の意義」『言語文化論究』（九州大学大学院言語文化研究院）No. 10，147-160頁
yubun@rc.kyushu-u.ac.jp
http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~yubun/index.html

How to Improve Movie Appreciation of University Students

The author's main research field is an analysis of the present-day English language in terms of generative syntax and he is also interested in English education with the help of computers (and network), but he has annually acted as an organizer of a half-year lecture course on movies in the general education program at Kyushu University since 1996.

The purpose of this lecture course lies in the enhancement of movie appreciation of Kyushu University students. In Suzuki (1999), the author considered why Japanese university students, unlike students in foreign countries of a similar age, have only poor knowledge and experience of movies in comparison with other arts like music and novels and then he pointed it out as one of the reasons that movies are not seriously taught in compulsory education in Japan.

The present study focuses on which directors' works we should present to students in order to improve their appreciation of films in such a way that they will not miss what movies have to give to them. The author claims that students should overcome, by watching those movies with appropriate instructions, their weaknesses as summarized in the observations below, which the author proves to be true based on the result of a questionnaire obtained from 201 students taking his movie course in 2001:

1) Students' interest is centered on American films while they have comparatively less familiarity with Japanese works. Furthermore, extremely rarely do they pay attention to non-Japanese Asian films.
2) Students tend to be concentrated on amusing movies rather than artistic works.
3) Students watch classical Japanese films very rarely when they watch quite a few western classical features.